

推理小說代表作選集





The mys of Japan

1976=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編 講談社



1976年版 推理小説年鑑
推理小説代表作選集

昭和51年 4月24日 第1刷発行

編者 日本推理作家協会
発行者 野間省一
発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話東京(945) 1111 振替(東京) 3930

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに表示してあります。

(文2)

1976年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集／目次／

序・	序・	序・	序・	序・	序・	序・
日本早春図	日本早春図	日本早春図	日本早春図	日本早春図	日本早春図	日本早春図
赤い落差	赤い落差	赤い落差	赤い落差	赤い落差	赤い落差	赤い落差
証拠なし	証拠なし	証拠なし	証拠なし	証拠なし	証拠なし	証拠なし
恐怖の賀状	恐怖の賀状	恐怖の賀状	恐怖の賀状	恐怖の賀状	恐怖の賀状	恐怖の賀状
冷たいのが好き	冷たいのが好き	冷たいのが好き	冷たいのが好き	冷たいのが好き	冷たいのが好き	冷たいのが好き
割れた電球	割れた電球	割れた電球	割れた電球	割れた電球	割れた電球	割れた電球
トルストイ爺さん	トルストイ爺さん	トルストイ爺さん	トルストイ爺さん	トルストイ爺さん	トルストイ爺さん	トルストイ爺さん
佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋
陳 舜 臣	陳 舜 臣	陳 舜 臣	陳 舜 臣	陳 舜 臣	陳 舜 臣	陳 舜 臣
小林久三	小林久三	小林久三	小林久三	小林久三	小林久三	小林久三
佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋	佐野 洋
山村美紗	山村美紗	山村美紗	山村美紗	山村美紗	山村美紗	山村美紗
小泉喜美子	小泉喜美子	小泉喜美子	小泉喜美子	小泉喜美子	小泉喜美子	小泉喜美子
鮎川哲也	鮎川哲也	鮎川哲也	鮎川哲也	鮎川哲也	鮎川哲也	鮎川哲也
草野唯雄	草野唯雄	草野唯雄	草野唯雄	草野唯雄	草野唯雄	草野唯雄
169	143	117	93	71	37	9

怨の複合・・・・・・・・・・	麗羅	195
紺碧からの音信・・・・・・・・	森村誠一	225
雨の夜、誰かが死ぬ・・・・・・・・	菊村 到	249
死の国のアリス・・・・・・・・	海渡英祐	269
グリーン車の子供・・・・・・・・	戸板康二	293
噂を集め過ぎた男・・・・・・・・	石沢英太郎	307
特急夕月・・・・・・・・・・	夏樹静子	329
推理小説界展望一九七五年・・	大内茂男	346

S F界1975	石川喬司	351
受賞リスト		355

装幀 細谷 巖

序

日本推理作家協会理事長

佐野 洋

毎月、十誌に余る小説雑誌が刊行され、そのほとんどすべてに、推理小説と銘うたれた作品が掲載されている。少なくみつもっても、月平均約三十本の推理小説が、創作され読まれている勘定である。

推理小説が、これほど歓迎されたことは、かつてなかったと言っても過言ではあるまい。

だが、これは手放して喜んでばかりいられる現象ではないようだ。限られた数の作家が、期間を限られながら、幾つもの作品を執筆しなければならぬ以上、そこにある程度の無理が生まれるのは、自明の理と言える。いきおい、未成熟、発酵不足の作品が活字になる場合もないとは言えない。

「作家は、読み捨てにされる運命にある、短編の執筆に追われていては、才能を消耗するだけだ。それよりも、腰を落착けて、長編に打込むべきだ」という、批評家、愛好家の

声も、こうした傾向への警鐘であらう。

しかし、私どもは、決して、短編を一種の消耗品と考え、読み捨てにされる運命にあると、諦めているわけではない。

限られた枚数の中に、長編とは違った趣向、味、驚きなどを盛り込むべく、努力を凝らしているのである。

本選集は、日本推理作家協会が、その事業の一つとして、毎年選んできた代表作アンソロジーの一九七六年版であるが、ここに選ばれた各作品をお読み下されば、右の私の言葉が、決して、単なる弁解でないことが、分っていただけると思う。なお、本選集に収められた、戸板康二氏の「グリーン車の子供」は、本年度から設けられた推理作家協会賞（短編部門）の受賞作品である。

最後に、本選集を選ぶため、三百編近くの短編に目を通され、熱心な討議を重ねて下さった編集委員、多田兼成、千代有三、戸川安宣、萩原光雄、武蔵野次郎の諸氏にお礼を述べておきたい。

（なお、このほか、松本清張氏の『山峡の湯村』も選ばれたが、作者が辞退したことを付記したい）

一九七六年四月

1976年版 推理小說年鑑

推理小說代表作選集

日本早春圖

陳

舜

臣

桜井卓治は、大阪の学校で私と同級生であった。私は神戸から通学していたが、ときどき帰りに途中下車をして、芦屋にある彼の家に寄った。

桜井家は江戸初期からつづいてゐる造り酒屋で、銘酒『桜獅子』の醸造元である。芦屋の彼の家は、千坪もある豪邸で、日本ふうであったが、奥まったところに、一つだけ洋風の建物があった。

「あそこに祖父さんのコレクションが置いてあるんや」と、桜井卓治は私に説明してくれた。

戦時中、学生の私がよく彼の家に寄ったところ、白髪の瘦せた老人を見かけたが、それが彼の祖父であった。戦後、まもなく亡くなったが、美術品の蒐集はそのじいさんだけではなく、その先代も先々代も熱中したそうだ。

「それにしたら、おまえ、ぜんぜんあかんやないか」
私は彼にそう言ったおぼえがある。

桜井卓治は、美術なんかまるで関心をもたない学生であった。一しよに奈良へ遊びに行ったとき、私が博物館（当

時は帝室博物館といっていた）へはいろいろとすると、彼は、

「おれはやめや。そんなんの見るひまがあったら、そのへんで寝ころんだほうがましや」

と言って、奈良公園の芝生に横になって、私が出てくるまで待っていた。三月堂で拝観料を払おうとすると、

「勿体ないことしよるなあ」

と、大金持の息子らしくないことを言った。かといって、儉約家ではない。飲み食いについては、ぜいたくもいゝところであった。ながいつき合いで、私は彼が生まれつきの浪費家であることを知っている。

遊び好きの卓治は、戦後、ずいぶんこたえたようだ。素封家の桜井家はびくともしないが、厳格な兄が復員し、彼の懐工合がさびしくなったのである。軍資金に困った卓治は、ついに先祖伝来の蒐集品に手をつけようとした。そのほかに、金を捻出できるあてはなかったのだ。

卓治にはチャンスがあった。

祖父が病気がちになり、しかも目がかすれてきたのである。陶磁のたぐいは、手にふれてたのしむが、目で見る書画は、もう鑑賞する能力が衰えはじめた。

父の桜井修蔵も、祖父に仕込まれて、かなりの目ききであったが、当時は家業に忙しく、ほかのことはかえりみるひまがなかった。兄の省治もおなじであった。

わが友卓治は、

——法律をやり直して弁護士になる。

と、文科を卒業したあと、法科に入学し、相変わらず学生生活を送っていた。学生の身分でいたほうが、のんびり遊べると、彼らしい魂胆だったのである。

そのうえ、桜井家のコレクションは、阪神間は空襲の危険が濃厚なため、卓治の母の故郷である但馬に疎開して、戦後、それが芦屋に戻されたばかりなので、収蔵庫のなかはまだ整理がすんでいなかった。

収蔵庫の前の部屋には、桜獅子酒造を停年退職になった河村茂という男ががんばっていたが、彼とて一日じゅうそこにいるわけではない。河村は桜獅子酒造に籍を置いてはいたが、奈良の骨董屋の生まれで、これまで卓治の祖父の蒐集の助手をつとめていたのだ。

桜井家は縁者が多いが、戦時中に焼け出された連中が、数家族、居候していた。家のなかで、たえずざわざわしたかんじであったのも、卓治にとってはもっけの幸いであつたろう。

ある日、桜井卓治は風呂敷包みをぶらさげて、私の家に来て来た。

「おい、これを預かってくれ。なかみは掛軸や」

「とうとうやったのか」

私はちょっぴり非難の響きを、その言葉にこめて言った。

「うん、ちょっと笑うてきた」

卓治はにやりと笑った。

『笑う』とは、当時の学生言葉で、他人の物を失敬する意味である。はっきりいえば偷みだが、

——体操帽忘れたから、隣の教室で笑うてきました。

といったふうに、かんじとしては軽い。この笑つてきた物品は、ときどきそつと返還することもある。

「また返してもらうんか？ ……つまり、担保にするつもりか？」

と、私は訊いた。

桜井家のコレクションのなかには、どんな貴重な美術品があるかしかない。卓治のような道楽息子のために、それが散逸するのは惜しいことだ。大袈裟に言えば、人間が積みあげてきた美の世界の一角を、つき崩すような行為になるおそれもある。そんな悪事に手を貸すのは、私としても寝覚めがよくない。とはいえ、卓治との友情もある。ただの担保であれば、またあの桜井家の収蔵庫に戻るだろうから、目をつぶって預かってよい。——私はそう思つて訊いたのである。

「こんな時代に、担保やなんて、そんな悠長な話できるかいな。それに、こんなもん、ぎょうさんあるわ。ほな、頼むで」

卓治は私にことわられるなど、ゆめにも思っていないようだった。まるで駅の一時預かり所に、ポストンバッグでも預けるような気軽さで、私の前に包みを押しつけた。

「弱ったなあ」

と、私は眉をしかめた。

「弱ることないやないか。なにも売ってくれとは言うてない。預かってもらうだけや。……そや、まず一本、売りに行こ」

卓治は包みのすきまから、手をさしこみ、細長い桐の箱を一つ抜き出した。いとも無造作なしぐさであった。すくなくとも美術品を扱う手つきではない。

卓治はそれを小脇に抱えて出て行こうとする。私は彼の背中に、

「おい、待てよ」

と、声をかけた。

「なんやねん？」

「預かるいうても、責任があるやないか。あとで足らんとか、なんとか、問題がおこったら困るで」

「信用する。信用するから、預けに来たんやないか。……急ぐよって、もう帰らしてもらうわ」

「おい、せめて数だけでも……」

「そやな。……なんぼ持って来たかいな？」

卓治はやっと引き返した。彼は笑ってきた掛軸の数もかぞえていないのである。私は包みをほどこいた。桐の箱は五つあった。

「そや、半ダース持ち出したんや」

と、卓治は言った。数だけは思い出したのだ。

「それから、箱のうえに書いてある字、写しとかなあかんのとちやうか？」

「そんなじゃまくさいこと、もうええわ」

「品物が変わったいうて、文句いわれたら困るで」

「おれ、文句なんか言わんわい」

卓治はそう言うのと、さっさと帰って行った。

品物がちがうかどうか、あとで問題になるわけではない。だいいち、卓治は自分がどんなものを持ち出したか、確かめてもいいのだから。

2

三日後に、桜井家の収蔵庫の番人河村茂老人がやって来た。

「卓治さんは、こちらにおみえになったでしょうね？」

私は老人の顔をみたとき、

(さては、ばれたな)

と直感した。いつもの顔ではない。こわばっていたし、目は血走っていたのだ。声もふだんとはちがっていた。

あの膨大な収蔵品のなかから、半ダースの掛軸を抜き出して、すぐにはわかるまいと、卓治はたかをくくっていたようだ。しかし、三日目に、はやくもわかってしまった。あとで考えてみると、疎開から戻って未整理であることは、物品が無くなったことに、かえって早く気づく状態

なのだ。未整理とは、これから整理することで、整理とは台帳と現物とを照らし合わせることである。

（卓治にはわるいが、ここは正直に白状すべきである）

私はそう思った。

我が家の物とはいえ、無断で持ち出した卓治が悪いのだ。法律的に所有者が卓治の父か祖父であれば、卓治の行為は窃盗ではないか。直系血族の場合は刑が免除されるかもしれないが、私は他人だから、贓物（ぞうぶつ）を收受した犯罪となるのではあるまいか？ 卓治が帰ったあと、私は六法全書をひっくり返して調べてみたほどである。

「はい、三日前に来ました」

私は観念して白状した。

「なにか持っていないませんでしたか？」

「掛軸を預かってくれと……」

「預かって……じゃ、まだ、お宅にあるんですね？」

河村老人は、はずんだ声で言った。

「いえ、その……六本持って来て、五本置いて行っただけです。強引に……ことわりようがなかったもので……」

私はしどろもどろで答えた。

「み、見せてください、そ、それを」

河村老人は興奮したのか、吃り（くつき）ながらそう言った。私のところへ来るまでに、ほうぼう心あたりの場所をたずねたのであろう。やっとたずねあてたのだから、気がたかぶるのもむりはない。だが、さすがに年甲斐もないと反省した

のか、

「いや、失礼いたしました。いきなり、こんなことを申し上げて」

と、つけ加えた。

私は風呂敷包みを押入れのなかから取り出して、河村の前に置いた。

「卓治君はこのなかから一本持って行っただけです」

と、私は言った。

「では、拝見いたします」

河村はうやうやしく包みの結び目をほごいた。なかからあらわれた五つの桐箱のうえには、それぞれ達筆の文字が記されていた。

「ああ……」河村はそれをあらためたあと、大きなため息をついた。——「あれを持って行きましたな、卓治さんは」

私が見たところでは、河村は卓治が持ち出した六本の掛軸のうち、五本が無事なのをよろこぶよりも、『あれ』一本が持ち出されたのを歎いているようだった。

「あれとは？」

と、私は訊いた。

「唐寅（たういん）の日本早春図です。……ま、仕方がありません。ところで、お願いがあるんです」

河村は眼鏡に手をやった。いかにも気の弱そうな老人である。当時の私には老人にみえたが、まだ六十にはなっていないかったのだ。

「ええ、お持ち帰りください。卓治君には、ぼくが言えますよ、悪いことはできないものだ」と

「いえ、卓治さんは、ご自分がなにを持ち出したか、ご存知ないようですから……私がかわりの五本を持ってきて、すりかえておきましょう。あまりよくないものと」

「よくないとは？」

「いろいろ集めているうちに、ときには妙なものをつかまされますからね」

「桜井さんでも？」

妙なものとは、^{贋物}のことであろう。桜井家は、昨日今日にはじまったコレクターではない。それを贋物をつかまされたというのは、私にとっては意外なことであった。

「ときには、よくないものとわかって、買うこともありますよ。美術商もふだん儲けさせておかないと、これはという逸品をまわしてくれませんかからね」

と、河村は言った。

「そうですね。……ま、卓治君はどうせ二束三文で金に換えるでしょうから、贋物でけっこうですよ」

私は河村の案に賛成した。卓治はなにを持ち出したか知らないの、員数さえそろえておけばよいのである。そうすれば、私もくどくどと弁解しなくてすむ。それで名品の散逸を防がれるのだから、いうことはない。

その日のうちに、河村は五本のよくない掛軸を持ってきて、風呂敷包みのなかのものとすりかえた。

「卓治さんがおいでになりましたら、先に持って行かれた一本、どこへお売りになったか、訊きだしていただけませんか。……それから、それが……間違いないと思います。が、唐寅の日本早春図であったかどうか、できれば確かめていただきたいのです。はい、わかりましたなら、ご面倒でも、お電話くださいますよう、お願い申し上げます」

帰るとき、河村は哀願するようにそう言った。

「わかりました。……でも、卓治君は鉄砲玉みたいで、いつあられるかわかりませんよ。物がここにあるんですから、いつかはやって来るでしょうが」

「お金がなくなれば、きつとこちらへお越しになりますよ。……やれやれ、家にもお戻りではなく、いったいどこで泊っていることやら。……」

河村は首を振りながら、私の家を出た。

卓治が私のところにあらわれたのは、その二日後のことだった。

昭和二十三年のころで、その掛軸は八千円で売れたそう。いくら当時の貨幣価値が今とは違うとはいえ、唐寅の掛軸が八千円とは安すぎる。

卓治がおぼえていたのは売った金額だけであった。私も顔だけは知っている、三宮の富岡というブローカーが中にはいったが、売った相手が誰であるか、卓治は知らなかった。

「そんなこと訊けるかいな。まるで富岡を信用せんような